

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日タイ両語における擬音語・擬態語について
Author(s)	パニパー ストーンムニー,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 18期 : 1 - 23
Issue Date	2004-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038853
Right	
Relation	



日タイ両語における擬音語・擬態語について

パンニパー・スントーンムニー

0. はじめに

日本語の擬音語・擬態語は、日常会話やマンガなど、日本人の生活において様々な場合に幅広く直感的に用いられている。しかし一方で、タイ語の擬音語・擬態語は、普通子供の言葉だと考えられており、一部の書き言葉やマンガ以外ではあまり使われない。そのため日本語を学ぶタイ人にとって、擬音語・擬態語の理解や習得は大変難しいことだとしばしば言われている。そこで本稿では、日タイ両語の擬音語・擬態語について調査・分析し、両者の間の類似点・相違点を明らかにしていきたいと思う。

1. 擬音語・擬態語とは？

『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編、角川書店、昭和53年）によると、擬音語・擬態語について次のように説明されている。

擬音語：外界の音を写した言葉

○擬音語：無生物の音を表すもの

（例）雨がざあざあ降る。　　どんどん戸を叩く。

○擬声語：生物の声を表すもの

（例）犬がわんわん吠える。　猫がにゃーにゃーと鳴く。

擬態語：音を立てないものを、音によって象徴的に表す言葉

擬態語：無生物の状態を表すもの

（例）星がきらきら光っている。

擬容語：生物の状態（動作容態）を表すもの

（例）彼女はにこにこ笑う。

擬情語：人間の心の状態を表すもの

（例）バスがなかなか来ないので、いらいらしている。

この辞典では、擬音語は、擬音語と擬声語の二種類に、擬態語は、擬態語、擬容語、擬

情語の三種類に分類されているが、これらは一般的な用語ではない。広く用いられているのは、擬音語・擬態語という用語である。また、擬音語・擬態語の呼び名をさらに調べてみると、擬音語・擬態語を併せてオノマトペまたはオノマトピアという外来語が使われることもある。

2. 日タイ両語における擬音語・擬態語の形態的特徴

2. 1 日本語

日本語における擬音語・擬態語は、ほとんど「CV」（子音+母音）から成り立つ一モーラ（または音節）ないし「CVCV」（子音+母音+子音+母音）の二モーラを語基（基本形）として持っている。日本語のモーラと音節はだいたい一致するが、文献によって促音・撥音等の扱い方が異なる。本稿では日本語に関しては、モーラという用語を用いることにする。

2. 1. 1 一モーラの語基を持つ擬音語・擬態語の形態

1に示すように、一モーラの語基だけで用いられている形態は余り多くない。

1. 一モーラ： ふと 思い出す。 つと 立ち上がる。

しかし、一モーラの語基で構成されているものでも「促音」（っ）や「撥音」（ん）が付いたり、母音が長音化されたものは多く見られる。また語基を繰り返す形態（反復形）も一般的である。以下に、一モーラから成る例を示す。

2. 促音： かつ、さっ、はっ、ぱっ、ふっ、きゅっ

3. 撥音： かん、ぐん、ばん、ばん、わん、きゅん

4. 長母音： かー、がー、きゃー、にゃー、きゅー

5. 反復形： かんかん、ばんばん、かーかー、きゃーきゃー

さらに、6に示すように、2. と3. が長音化された形態もある。

6. かーっ、さーっ、ぱーっ、ぼーっ、きゅーっ、かーん、がーん、ぐーん、 ぼーん、きゅーん

例からわかるように、一モーラの語基から成るものは、ほとんどが擬音語である。

2. 1. 2 二モーラの語基を持つ擬音語・擬態語の形態

1. 二モーラ： ぐい（と）、はた（と）、ひし（と）

日本語における擬音語・擬態語は、二モーラの基本形を持つものが最も多い。しかし、「ぐい」「はた」「ひし」のように二モーラだけで構成されるものは希である。

一般的には、二モーラの語基に、「促音」（っ）や「撥音」（ん）が付いたものが多い。

2. 促音：がたっ、きらっ、ころっ、ばたっ、ぽきっ

3. 撥音：がたん、ころん、ばたん、ぺたん、ぽきん

また、語基が繰り返されるもの（反復形）が一般的であり、最も典型的な形態だと考えられる。

4. 反復形

4. 1 がたがた、きらきら、ばたばた、べたべた

その他、次の例のように、二モーラの反復形変種ものもある。

4. 2 からころ、かさこそ、どたばた、ぺちやくちゃ

4. 3 ちやほや、ちらほら、てきぱき、のらくら

4. 2の例の場合は、よく似た意味を持つ二モーラの語基を組み合わせたものである。例えば、「かさこそ」は、「かさかさ」の「かさ」及び「こそこそ」の「こそ」が組み合わさった語だと考えられる。

「ちやほや」や「てきぱき」など、4. 3の例の場合には、「ちや」と「ほや」あるいは「てき」と「ぱき」を組み合わせた語ではなく、反復形の後部が変化した形態だと考えられる。

さらに、二モーラの語基から成るものの中には、「り」を伴うものも多く見受けられる。

5. 「り」：がたり、きりり、ころり、ばたり、ぽきり

次の例は、二モーラの間には促音ないし撥音が付加され、「り」が語末に付いている形態である。これらは、日本語においてよく見られる一般的な形態である。

6. がっくり、くっきり、さっぱり、すっきり、ぱったり、こんがり、すんなり、ぼんやり、のんびり、ふんわり

7. の例は、二モーラの間には促音または撥音が入ったものであるが、数は多くない。

7. すっく、どっか、はっし、ざんぶ、むんず

8. の例は、特殊な形態を持つ擬音語・擬態語であるが、数は多くない。

8. その他：こけこっこう、すってんてん、とんちんかん、ゆっくりかん

前にも述べたように、日本語における擬音語・擬態語の形態は、基本形として一モーラないし二モーラの語基を持つ。しかしながら、「ふ（と）」や「ぐい（と）」のように、一モーラないし二モーラの語基がそのまま使われているものはきわめて希である。「こけこっこう」のような特殊な形態を除けば、語基に促音、撥音、「り」が付加されたり、母音が長音化されたり、あるいは語基を繰り返した形態が一般的である。特に、「くるくる」、「いらいら」、「べたべた」のように、語基を単純に繰り返す反復形は数多くある。

以上から、促音化・撥音化・「り」の付加・長母音化・反復が、日本語における擬音語・擬態語の形態的特徴だと言えるであろう。

2. 2 タイ語

タイ語における擬音語・擬態語の一番短い形態は、「C V (子音+母音)」または「C V C (子音+母音+コーダ) から成る一音節のものである。しかしながら、日本語同様に一音節だけで用いられるものは少ない。しかも、現代語として使われているものは、ほとんどが擬音語である。以下に、タイ語における擬音語・擬態語の一般的な形態の例を示す。

1. 一音節の語基を持つ擬音語・擬態語の形態：

1. 1 「kriid (驚き恐れる高い悲鳴。「きゃー」に近い)」、「pang (打ち上げ花火や銃などの音)」、「miao (猫の鳴き声)」、「pleng (堅いものが落ち割れるまた壊れる音)」、「web (瞬間的に星や光が光るさま)」

「kriid」のように、一音節の形態だけで使われているものも見られるが、一般的には、「kriid-kriid」「pang-pang」「miao-miao」のように音節を繰り返すものが非常に多い。

1. 2 「soo-see (体が力なくよろめくさま。また不安定なさま)」「ngud-ngid (落ち着かない、気があせるさま)」「ciaw-cau (物事が騒ぐさま、ざわめくさま)」「wew-wau (星や宝石が長時間に光るさま)」

1. 3 「klean-klaad (全般的に物や人物がいっぱいいるさま)」「kee-kang (落ちつかないさま。目的がない、または一つに定まらず考えゆれ動くさま)」「cha-chaan よどみなくしゃべるさま)」「ngok-ngern (落ち着きのないさま。また戸惑うさま)」

1. 2 と 1. 3 の例は、一音節の反復形の一部が変化したものを示した。すなわち、1. 2 の場合は母音だけが変化したものであり、1. 3. の場合は母音及び終結部 (コーダ) が変化したものだと考えられる。

2. 二音節の語基を持つ擬音語・擬態語の形態：

2. 1 「kee-kee kang-kang (「kee-kang」の連続的な意味を表す)」、「ngok-ngok ngern-ngern (ngok-ngern の連続的な意味を表す)」、「tum-tum tom-tom (心臓がドキドキするさま。また運動、興奮、恐怖、不安などで激しく動揺するさま)」

2. 2 「kra-sik kra-sik (小さい鳴き声)」、「lok-laek lok-laek (あわてたり、うろたえたりするさま。また落ち着かなくあたりを見まわすさま)」

2に挙げた例は、二音節の反復形で四音節の形態を持つものである。2. 1 と 2. 2 の

例は、「AABB」と「ABAB」の形態を持つもので、動作・状態の継続を表すものが非常に多い。次は、語基の後部が変化した「ABAC」の形態である。

2. 3 「ka-rung ka-ring (もろく砕けたりくずれたり、ばらばらになったりするさま)」、
「kra-mup kra-mip (口を十分開けずに小さい声で言うさま。また小言や独言を言うさま)」、
「ra-yip ra-yap (連続的に星や宝石などが光るさま)」

2. 4 「kra-cad kra-caai (乱れ散らかるさま。またまとまりのないさま)」「sa-uk sa-uun (小さい声で泣く)」「ta-klum ta-klaam (大きい口を開けて無作法に食べるさま)」

2. 3と2. 4は、反復形変種だと考えられる。2. 3に挙げた「ka-rung ka-ring」や「kra-mup kra-mip」の例は、「rung-ring」や「mup-mip」という語だけでも意味を表すことができる。そのため、二音節を使用する場合もある。一方で、2. 4の場合は、「cad-caai」「uk-uun」「klum-klam」という語だけでは使用されない。上述の1と2の例から、次のことを指摘することができる。

タイ語において普通に使用されている擬音語・擬態語は、一音節・二音節の語基を持つものが非常に多い。一音節は最も短い形態であり、擬音語として使われているものが過半数を占めている。ただし、一音節の語は単一形態としてはあまり使われていない。一般的には「kriid-kriid (きゃーきゃー)」のように、反復形が多い。

また、最も典型的だと言える形態は、1. 2と1. 3のような反復形であろう。1. 2は母音だけが変化したものであり、1. 3は子音及び終結部が変化したものである。2. 1は「AABB」(kee-kee kang-kang)、2. 2は「ABAB」(kra-sik kra-sik)の形態であり、また2. 3と2. 4は「ABAC」(ka-rung kra-ring)の形態である。なお、「eak ii eak eak (こけこっこう)」のような特殊形態もあるが、希である。

さらに、強調を表すため一音節を二回以上繰り返したものもある。ただし、マンガや文庫以外ではほとんど用いられていない。例えば、「tuk tuk tuk⇒バタバタバタッ」(『ピーチガール』上田美和著 日本語版とタイ語版2002年)

2. 3 日本語とタイ語の対照

2. 2では、日タイ両語における擬音語・擬態語の形態的特徴を示した。本節では、両言語における擬音語・擬態語の形態的特徴についての比較を行う。

日本語における擬音語・擬態語の一番短い形態は一モーラであり、タイ語では一音節である。日タイ両語における擬音語・擬態語の最も典型的な形態は反復形である。また、音

が一部変化した反復形変種もよく用いられる。

英語においても、「flip-flap (ばたばた)」「murmur (ざわざわ)」「click-crack (ぱちぱち)」のような反復形は多い(『日英擬音・擬態語活用辞典』尾野秀一編著)。例えば、「flip-flap」という英語は、日本語では「ばたばた」に、タイ語では「ngun-ngaan」ないし「plun-plaan」に当たる。反復形が用いられているのは、日本語とタイ語だけではない。

日本語の擬音語・擬態語には、「促音」(っ)、「撥音」(ん)、「り」が付加されたり、あるいは長母音化の起こったものも多く見られるが、タイ語においては、これらの現象が見られない。タイ語は「CVC」という音節を持ち、終結部(コーダ)を持つため、各音節の間を完全に分けるので、「促音」(っ)が付く形態が見つからないと考えられる。「撥音」(ん)は、タイ語において終結部の一つだと考えられているので、「撥音」(ん)を付加する形態がないのである。また、強調のための長音化はタイ語では見られない。タイ語には、既に母音の長短による区別があるからである。

3. 日タイ両語における擬音語・擬態語の文法的機能

本章では、日タイ両語における擬音語・擬態語が文章中でどのように用いられるのか、すなわち、文法的にどのような機能を持っているのか考察してみる。

日本語における擬音語・擬態語は、基本的には動詞を修飾する「副詞」として使用されている。また、「動詞」や「名詞」等、他の品詞に変わったものも多く見られる。他方、タイ語においても、擬音語・擬態語は「副詞」として使用されるのが一般的である。両言語における擬音語・擬態語は、それぞれどのような文法的働きをするのかを見ていこう。

3. 1 「副詞」

日本語においても、タイ語においても、擬音語・擬態語の基本的な機能は「副詞」として文中の他の用言を修飾することである。日タイ両語の雨が降る様子を表す例を見てみよう。

雨がしとしと降っている。⇒fon tok pram-pram.

雨がぱらぱら降っている。⇒fon tok po-pae.

「しとしと」や「ぱらぱら」は、「降る」という動詞を修飾する副詞だとわかる。一方タイ語においても、「pram-pram」や「po-pae」は、「tok (降る)」という動詞を修飾する副詞である。なお、タイ語においては、動作や感情などを描写する擬態語が副詞として翻訳的に使われると、「yarng」という接頭辞が付くことがある。例えば、「ぼんやり」はタイ語で「mer-loi」と訳される。副詞として使用される場合は、「動詞+(yarng) mer-loi」にな

る。擬音語の場合は、「yarnɡ」と共に用いられない。

3. 2 「動詞」

日本語では、「動詞」として用いられる擬音語・擬態語が数多く見られる。「副詞」のように、そのままの形態を用いるのではなく、「する」や「つく」等が付加され、動詞化されるのである。

1. 「する」の付加

例：かっとする しゃんとする あっさりする げんなりする いらいらする
ぎくっとする きちんとする

これらは、擬音語・擬態語に「する」が付加されたものであり、最も数が多い。特に、「あっさり」のような「□っ□り」形態、「げんなり」のような「□ん□り」形態、また「うろろう」のような反復形が非常に多い。

2. 「つく」の付加

例：いらつく がさつく ばさつく ねばつく むかつく もたつく

2の例は、二モーラ反復形の語基に「つく」が付加されたものである。例えば、「いらつく」や「がさつく」は、「いらいら」「がさがさ」から派生したものだと考えられる。

また、1.の「いらいらする」及び2の「いらつく」は両方とも「いらいら」という二モーラ反復形の語基から派生したものであるが、微妙に異なるニュアンスを表す。

「つく」によって動詞化されたものは、マイナスイメージを表すことが多い。しかしながら、マイナスイメージを持っているものが全部「つく」によって動詞化されるとは限らない。例えば、「おずおず」には「おずつく」という形態がない。

3. その他の動詞

例：きらめく ざわめく ぼやける よろける ひたる よたる

これらは、いずれも例のように「めく」「ける」「る」等の接尾辞が付いた形態である。このうち、「めく」と「る」は、「つく」同様にマイナスイメージを表すものが多い。

次に、タイ語について見てみよう。タイ語においても、擬音語・擬態語は動詞として使用されるが、接尾辞等が付加されることはなく、そのままの形態で用いられ、語順としては動詞の位置にたつ。

例： pro waa mer-loi ko lei kun rod keun]

⇒「ぼんやりしていたら、乗り過ぎしてしまった」

例えば、タイ語の「(yarnng) mer-loi (ぼんやり)」は、普通は文中で副詞として使われているので、動詞の後ろに置かれるが、日本語の「ぼんやりする」のように動詞化されると、「mer-loi」というそのままの形態で動詞の位置に置かれる。ただし、動詞化するのは擬態語がほとんどで、擬音語が動詞化するのは希である。

3. 3 「名詞」

3. 3. 1 日本語における擬音語・擬態語は、臨時的にそのままの形態で名詞として使用される場合もある。

例：(a) 隣の犬が**わんわん**鳴いている。

(b) 隣の**わんわん**に噛まれた。

二つの文を比べると、「わんわん」の文法的機能が違っていることがわかるだろう。すなわち、(a) 文の場合は、「わんわん」が「鳴く」という動詞を修飾する副詞として使われており、(b) 文の場合は、「わんわん」が犬の意味を表す名詞として使われている。このように、名詞として使われるものはほとんどが擬音語であり、「幼児語」として用いられるのが典型的な使い方である。次の例文を見てみよう（『必携国語辞典』大野晋 田中章夫編）。

例：(c) **もやもや**した気分が残る。

(d) **もやもや**が晴れない。

二つの例を比べると、(d) 文の「もやもや」は (b) 文同様に形態を変えずに名詞として機能していることがわかる。

3. 3. 2 「つく」、「めく」によって動詞化された擬音語・擬態語は、「つき」、「めき」という名詞形を持つ。

例：「いらつく」⇒「いらつき」 「がさつく」⇒「がさつき」

「きらめく」⇒「きらめき」 「ざわめく」⇒「ざわめき」

3. 3. 3 「複合名詞」

日本語の擬音語・擬態語は、後ろに他の語を伴って、「複合名詞」を構成することがある。

例：1. ひそひそ話 ぶつぶつ言い よちよち歩き

2. がら空き びしょ濡れ ぼろ負け

1と2は、擬音語・擬態語と動詞から成る動詞句が名詞化されたものである。1は反復形であるが、2は非反復形である。すなわち、「ひそひそ話」は「ひそひそ+話」（話す）から、「がら空き」は「がらがらに+空き（空く）」から成る語だと考えられる。

3. ごろ寝 ほろ酔い ぐい飲み

3は、1と2同様に動詞句と組み合わさったものである。しかし、反復形の語基ではない。例えば、「ごろ寝」は、「ごろごろ+寝る」ではなく、「ごろっと+寝る」から派生したものだと考えられる。

4. きらきら星 ばさばさ髪 ばらばら死体

4に挙げた例は、擬音語・擬態語と名詞から構成されたものである。「きらきら星」は、「星がきらきら輝く」から派生したものだと考えられる。

5. むつつり助平 ふんわりパン のらくら者

さらに、5の例のように、「□っ□り」や「□ん□り」また、反復形変種の擬音語・擬態語も名詞と結び付いて複合名詞になることがある。

タイ語においては、擬音語・擬態語が名詞として用いられることはほとんどない。「hong-hong (わんわん)」のように、「幼児語」として使われるものもあるが、非常に少数であり、日本語同様にほとんどが擬音語である。またタイ語においては、「kwaam」という接頭辞を添加して名詞化されることがあるが、この場合、名詞化されるものは、心理状態を描写する擬態語に限られる。

例：「waad-wan (おどおど)」 ⇒ 「kwaam waad-wan」

「ngeup-ngan (ひっそり)」 ⇒ 「kwaam ngeup-ngan」

また、日本語の「いらつく」のように、動詞化された形態がタイ語にないので、「いらつき」のような名詞形態もない。さらに、タイ語には擬音語・擬態語から派生した複合名詞はない。したがって、日本語の複合名詞をタイ語に翻訳する場合は、説明的に翻訳されることが多い。例えば、「きらきら星」をタイ語に翻訳すると、「きらきら輝く星」になる。

「星がきらきら輝く」	dau	soong saeng wew wau
「きらきら輝く星」	dau thii	soong saeng wew wau
「きらきら星」	dau thii	soong saeng wew wau

3. 4 「形容詞・形容動詞」

1. 形容詞

1. 1 「しい」または「い」が付加されて形容詞化される。

例：「しい」 : とげとげしい、けばけばしい、たどたどしい

「い」 : のろい、ぼろい、とろい、でがい、くどい

二モーラ反復形には「しい」が付加され、二モーラ反復形の語基には「い」が付加される。

1. 2 擬音語・擬態語の要素あるいは語基が接頭辞として形容詞に前接し、複合形容詞を構成する。

例：ほろ苦い (ほろっ(と) ⇒ ほろ+苦い)

ひよろ長い (ひよろひよろ ⇒ひよろ+長い)

2. 形容動詞

二モーラ反復形の語基に「やか」が付いて形容動詞化される。

例：にこやか、ひそやか、ゆるやか、しとやか、つややか

これに対して、タイ語では、形容詞として機能する擬音語・擬態語はあるが、派生形はない。つまり、そのままの形態で形容詞として機能できるということである。タイ語で動作や動きが遅い、また鈍い様子を意味する「yuud-yaad」という語の例を見てみよう。

例：1. のろのろ歩く。 ⇒Dern **yuud-yaad**.

2. のろのろする。 ⇒**Yuud-yaad**.

3. のろいしゃべり方。 ⇒karn puud **yuud-yaad**.

1～3は、「yuud-yaad」という語が副詞、動詞、形容詞として機能している例である。まず、1の例では、「yuud-yaad」が「dern (歩く)」という動詞を修飾する副詞として用いられており、2の場合は、動詞として機能している。3の例は、「karn puud」という名詞を修飾した形容詞として用いられている。例からわかるように、「yuud-yaad」はどの品詞で用いられても語形は変化しない。

3. 5. まとめ

1. 日タイ両語の擬音語・擬態語の最も典型的な文法的機能は、「**副詞**」としての機能である。
2. 日タイ両語の擬音語・擬態語には、「**副詞**」としての機能以外に、「**動詞**」「**名詞**」「**形容詞**」としての機能がある。
3. 日本語の擬音語・擬態語には、接尾辞の付加によって派生した形態がある。

例：「いらいら」⇒「いらいらする」

「いらいら」⇒「いらつく」

しかしながら、タイ語では、語順によって品詞を特定することができるので、新たな他の形態を作る必要がない。

4. 日タイ両語における擬音語・擬態語の形態と意味との関連性

4. 1 日本語

1. 特殊形態

前にも述べたように、「促音」(っ)、「撥音」(ん)、「り」、長音、そして反復形が日本語

における擬音語・擬態語の形態的特徴だと考えられる。「ぐらっ」、「ぐらん」、「ぐらり」「ぐらーん」、「ぐらぐら」のように、同じ語基を持ちながら形態の違いによって、微妙なニュアンスの違いを表すことである。このように、擬音語・擬態語の形態と意味は深く関わっている。

1. 1 **促音**：促音を含む語は、「瞬間性」、「急な終わり方」、「動作開始」または「スピード感」といった語感を持つ。

例：「さっ」：行動など急なさま。軽く動く、また早いさま。

「ぱっ」：突然あらわすさま。一瞬はなやかなさま。

「きらっ」：瞬間的に光るさま。

「ぐらっ」：ものが急に大きく揺れ動くさま。

「さっ」、「ぱっ」、「きらっ」、「ぐらっ」のように、突然動作が始まり、突然動作が終わる様子が感じられる。

1. 2 **撥音**：撥音で終わる語は、「弾力性」、「動作の完了から次の動作へ」、「共鳴」といったニュアンスを表す。

例：「かん」：鐘を打つ音。

「ぺたん」：餅をつく音。

「ぱたん」：ものをいきおいよく倒れたり閉じたりする音。

「ころん」：ものが弾んでか転がるさま。

例からわかるように、どれも勢いよく、「弾力性」を感じさせる。撥音が付くものは、ほとんどが擬音語で、余韻が残る感じを伴う。「ころん」の場合は、ものが一度転がって、その後また転がり始めることを予感させる。つまり、「動作の完了から次の動作へ」というニュアンスを暗示する。

1. 3 **「り」**：「動作終了、完了」または「ゆとりのある感じ」といった語感を持つ。

例：「ころり」：ものが転がって止まること。

「きらり」：瞬間的にすごみを帯びて光が輝く。

「ぐらり」：一回大きく揺れ動くさま。

例のように、「ころり」は、ものが転がって止まるイメージである。「ころっ」と比較すると、「ころり」は、「ころっ」よりスピードが遅く感じられる。また「ころん」が転がり続けるように感じられるのに対し、「ころり」は、動作が一回で終了することを表す。

1. 4 **長音**：母音が長音化された形態は、ほとんどが擬音語である。長音形は、「時間的継続」を表現するのに使用される。次の例を見てみよう（『擬声語・擬態語慣用句辞典』白石大二編）。

例： 1. 鐘がカンと鳴った。

2. 鐘がカーンと鳴った。

二つの文は、鐘の音を描写する擬音語であるが、2の文の方が余韻が響いているように感じられる。つまり、「カーン」は、「カン」より強く、鋭く、非常に長い響きを表現することができる。同様に、ものが転がる様子を表す「ころん」と「ころーん」を比べると、「ころーん」の方がやや時間をかけて転がるさまを表している。

また「カーン」同様に、「かー」、「がーん」、「きゃー」などの長音化した擬音語も多く見られる。長音化した擬態語は、「強調」に用いられることが多い。例えば、「ほーっと」は、「ほっと」の意味的強調形として使用される。

1. 5 **反復形**：「かんかん」、「きゃーきゃー」、「ころころ」、「きらきら」のように、「連続的」な音や動作・状態の継続を表現するには、反復形が最も用いられる。したがって、「ころころ」、「ころんころん」、「ころりころり」は、どれも連続した継続表現を示す。また、次の例のように、反復形になっても微妙にニュアンスが異なる。

「ころころ」：連続して転がること。

「ころんころん」：弾みをもって勢いよく転がること。

「ころりころり」：転がっては止まり、転がっては止まること。

2. 母音

2. 1 母音「あ」：

母音「あ」を含む語は、「全体」という概念を象徴的に表現する。

例： かん、かーん、ぱーっ、ばらばら、ぱたん、さらさら、ぱくぱく

「あ」という音は、必ず口を開けて発音するため、音が外に拡がっているように感じられるので、「大きい」「明るい」「広い」というニュアンスを与えると考えられる。

2. 2 母音「い」：

母音「い」を含むものは、甲高く小さい音であり、動きが素早いという印象を与える。また鋭い、突き刺す聴覚印象を与える。

例：「きりきり」：てきぱきと物事を運ぶさま。

「すいすい」：気持ちよさそうに軽く進むさま。

「ちかちか」：鋭い光が断続的に点滅するさま。

「ちくちく」：とがったもので刺されるような痛みが繰り返すさま。

「きんきん」：金属的に耳に鋭く響く高い音声。

「きりきり」や「すいすい」のように、「い」を含んでいる語は、素早いというニュアンスを表し、「ちかちか」や「ちくちく」は、鋭いというニュアンスを表す。また「きんきん」のように、甲高い音声を表すこともある。

2. 3 母音「う」:

母音「う」は、人間のくすんだ心理的情感や暗くはっきりしていないイメージを表す。

例：「ぐずぐず」：なかなか事が決まらない。はっきりしていないさま。

「うじうじ」：何かしようとしながら決心がつかず、ためらうさま。

「ぶつぶつ」声で何かつぶやくさま。また、不平や不満をもらすさま。

2. 4 母音「え」:

日本語において、母音「え」を含んでいる擬音語・擬態語は、品のない音声や状態を表す。

例：「げらげら」：大声でとめどなく笑うさま。

「へらへら」：だらしなく、むやみに笑うさま。

「ねちねち」：性質や話しぶりなどがあっさりせず、しつこいさま。

「げんなり」：十分すぎていやになるさま。

例からもわかるように、マイナスイメージを表すものが多い。

2. 5 母音「お」:

母音「お」が付くものは、こもった音声を表すと考えられ、鈍くて不明瞭なさまを表す。

例：「おろおろ」：不安にかられてどうしてよいかわからないさま。

「おどおど」：おびえたり自信がなかったりして落ち着かないさま。

「ごそごそ」：質のあらい物が触れ合う音。またそういう音を立てて、何事かをしているさま。

「ぼろぼろ」：もろく砕けたり崩れたり、ばらばらになったりするさま。

また、母音「あ」が「全体」という概念を象徴するのに対して、母音「お」は、「部分」という概念を象徴する。例えば、乱れ散らばるという意味を持つ「ぼろぼろ」と「ばらばら」を比べると、「ばらばら」の方が「ぼろぼろ」より広い範囲に散らかるというイメージを与える。日本語では母音は、「あ」や「お」を含む擬音語・擬態語が最も多い。母音「え」

を含む語は、数が著しく少ない。

3. 子音

3. 1 有声音・無声音

日本語の擬音語・擬態語においては、有声音（濁音）と無声音（清音、半濁音）がペアになっている形態がたくさん存在する。

例：「とんとん」「どんどん」、「ころころ」「ごろごろ」

これらは、基本的には同じ環境で用いることができるが、両者の間には、微妙なニュアンスの違いがある。次に、有声音と無声音のニュアンスの違いを例に挙げる。

- ・有声音は、無声音より大きく強いという印象を与える。

例：「とんとん、どんどん」叩く。

「ころころ、ごろごろ」転がる。

「とんとん」と「どんどん」は、いずれも物を叩く音を描写するが、有声音「どんどん」は、無声音「とんとん」よりも力強く叩いた大きい音を表す。また「ころころ」より「ごろごろ」の方が大きい物が転がるさまを表す。

- ・有声音は、無声音より数量や分量が多く、また重いと感じられる。

例：「たらたら、だらだら」（汗を）かく。

「とくとく、どくどく」流れる。

「たらたら」と「だらだら」の例をとると、「だらだら」の方が汗の量が多く、重い物が落ちるように感じられる。同様に、「どくどく」は、「とくとく」よりも重い物が盛んに流れるさまを表す。

- ・有声音は、無声音より激しい動作・状態を表す。

例：「かたかた、がたがた」揺れる。

「きらきら、ぎらぎら」輝く。

例のように、「かたかた」と「がたがた」は、いずれも揺れている状態を表すものであるが、「がたがた」は、どちらかという、揺れる程度が強く激しいというイメージを表し、「ぎらぎら」は、「きらきら」より激しく輝く強い光を表すと考えられる。

- ・有声音で始まる擬音語・擬態語は、マイナスイメージを表すものが多い。

例：「さらさら」、「ざらざら」

「しっとり」、「じっとり」

「ざらざら」と「じっとり」の例は、イメージ的に汚い様子ないし状態を表している。例えば、「ざらざらとした手」というと、手触りが荒く滑らかではないさまを表し、「さら

さら」を使う場合は、湿気や粘りがなくさっぱりとして美しいというニュアンスを含んでいる。

「しっとり」と「じっとり」は、水分を含んだ状態を表すものであるが、「じっとり」は、水分が過度にある状態を表すため、「じっとり汗ばむ」のように気持ちが悪いというニュアンスを表すのに対し、「しっとり」は、「しっとり潤い肌」のように適度に水分のあるさまを表す。

3. 2 破裂音

- ・破裂音「p」は、自然現象を描写する擬音語に用いられることが多い。

例：「ぽつぽつ、ぱらぱら」（雨の降る様子を表す）、「ぴゅうぴゅう」（風の吹く音）、「ぴかっと」（稲妻が光る）

また「p」は、音色が澄み、はっきりした調子の協和音であり、「b」は、濁った音色の不協和音である。

例：「ピー」「プー」（笛の音）、「ボー」「ブー」（汽笛の音）

- ・「k」「g」は、物がきしんだり、こすれたりして出る音を表すことが多い。

例：「こんこん、ごんごん」、「かたかた、がたがた」、「かんかん、がんがん」

- ・破裂音「t」「k」を含んでいるものは、堅いと感じられる。

例：「かたかた」、「がたがた」、「ことこと」、「がたびし」、「がちゃがちゃ」

これらは、いずれも堅い物が触れ合う時の音を表している。

3. 3 摩擦音

・「h」が付くものは、抵抗感がないと感じられる。なお、日本語では摩擦音「h」と破裂音「p」は有声音「b」と対立するので、「h」と「p」は、抵抗感がないという同じ音象徴を表すと考えられる。ただし、「h」は「p」より文章的な感じがある。

例：「はらはら、ぱらぱら」：軽い物がまばらに落ちるさま。

「ほろほろ、ぼろぼろ」：軽く小さいものがこぼれるように落ちるさま。

・「s」で始まる擬音語・擬態語は、スムーズ、あるいは滑らかな語感を持つものが多い。特に、「さ」と「す」で始まるものである。それに、素早い動作や様子を表すものもよく見られる。

例：「さらさら」：物事がつかえずに進むさま。

「すいすい」：気持ち良さそうに進むさま。

「さっと」：動作などが素早く行われるさま。

「すべすべ」：滑らかなさま。

3. 4 鼻音

・鼻音「m」は、円やかで柔らかい状態を表し、はっきりしていない不明瞭な感じを含むものも多い。

例：「むにゃむにゃ」：口の中でわからぬことを言うさま。

「もくもく」：煙・雲などが、たくさんわき立つさま。

「もぐもぐ」：口を十分開けずに物を言うさま。

「もやもや」：ぼんやりしているさま。またすっきりしないさま。

・鼻音「n」は、ゆったりとした感じ、行動が遅い様子を表す。例えば、「のそのそ、のろのろ、のっそり、のしのし、のっしのっし、のっしり、のんびり」のように、いずれも急がずにゆっくり動く、つまりゆったりした様子を表している。

また、次の例のように、鼻音「n」が付く多くの擬音語・擬態語は、柔らかく、粘りのあるニュアンスも表す。

例：「なよなよ」：柔らかくしなやかで弱々しいさま。

「ぬるぬる」：手触りが滑らかでやや粘りがあってすべりやすいさま。

「ねばねば」：よくねばって物につきやすいさま。

「ぐにゃぐにゃ」：曲がったり形が変わったりするさま。また柔らかで力のないさま。

3. 5 流音

流音が使われる擬音語・擬態語は、震え動く様子や震える不安定な状態を表す。例えば、「ふらふら、ぶらぶら」は、揺れ動くという意味であり、「よろよろ」（足取りが確かでない、倒れそうな格好になるさま）は、不安定な状態を表す。

3. 6 接近音

接近音「w」が用いられるものは、ほとんどが人間や動物が実際に発する音声である。

例： 「わんわん」、「わー」、「わーっ」、「わあわあ」、「わいわい」

4. 2 タイ語

1. 特殊形態

タイ語の擬音語・擬態語は、反復形が最も典型的な形態である。タイ語の反復形は、日本語の反復形同様に、いずれも動作・状態の繰り返しや継続を象徴すると考えられる。タイ語の擬音語・擬態語反復形は、次のように分けられる。

1. 1 一音節反復形は、ほとんどが擬音語だと考えられる。例えば、「kriid-kriid (きやーきやー)」「pang-pang (ばんばん)」のように、擬音語が非常に多い。基本的には、一音節を二回繰り返す形態であるが、マンガや小説などでは、強調のため二回以上繰り返されるものもある。

1. 2 次は、「AABB」「ABAB」という反復形である。例えば、「kee-kee kang-kang (ふらふら)」「lok-laek lok-laek (きよろきよろ)」のような例を挙げることができる。

1. 3 三つ目は、最も多い「ngun-ngaun (ばたばた、ぐずぐず、まごまご)」「cha-chaan (はきはき、ぺらぺら)」のような反復形及び、「kra-cad kra-caai (ばらばら)」「ra-yip ra-yap (きらきら)」のように「ABAC」といった形態を持つ反復形変種である。

2. 母音

タイ語の母音は、短母音と長母音に分けられる。したがって、日本語のように長音化されることはない。タイ語では、長母音と短母音が以下のように、異なったニュアンスを表していると考えられる。

2. 1 長母音は、短母音よりも大きいというニュアンスを表す。

例；「ha-ha」「haa-haa」：笑い声。

例のように、「ha-ha」「haa-haa」は、いずれも笑い声を表すが、長母音「haa-haa」の方が、短母音「ha-ha」より大きい声で笑うさまを表す。

2. 2 長母音は、短母音よりも共鳴のニュアンスを表す。

例：「tuum」：爆弾などが爆発する音。また大きいものが落ちる音。

「tup」：急に物が落ちる音。

「tuum」と「tup」は、物が落ちる音を表すが、「tup」は、物が一度落ちて終わる音を表すのに対し、「tuum」は、物が落ちてから、音がまだしばらく響き続けると感じられ、共鳴のイメージがある。

2. 3 長母音は、短母音より鋭い、高い音声を表現する。

例：「krik」：ドアの鍵をかける音。また小さい物が少し転がる音。

「kriid」：悲鳴をあげる音。

「krik」と「kriid」を比べると、長母音「kriid」の方が、短母音「krik」よりも鋭く

高い音声だと感じられる。

2. 4 短母音を含む多くのものは、マイナスイメージを表す。

例：「ka-rung ka-ring」：ものがもろく砕けたり崩れたりするさま。またぼろぼろになったりするさま。

「ner-na」：粘りがあるさま。ねっとり、ねばねばとしたさま。

「kru-kra」：ものの表面が平でないさま。でこぼこなさま。

「cher-che」：湿気が多く不快なさま。

「le-te」；どうにもならないほどまとまらないさま。

挙げた例は、いずれも不愉快や不満などの感じを表している。

2. 5 短母音は、素早い動作・状態や突然起こって急に終わるさまを表すものが多い。

例：「pria」：布など物が急に破れたさま。

「wep」：一瞬光るさま。

「chap」：物を切る音。また行動などが早いさま。

「pria」「wep」「chap」は、いずれも早さ、瞬間的な様子や状態を象徴するものである。興味深いことに、これは、日本語の擬音語・擬態語に現れる「促音」(っ)という特殊形態にも見られる現象である。タイ語の「pria」「wep」「chap」は、日本語の「びゅっと(裂く)」「ぴかっと(光る)」「ばさっと(切る)」に対応している。

3. 子音

タイ語は、「CVC」という音節を持つ言語であり、語頭に頭子音、語末に末子音を持つ。タイ語においては、頭子音だけでなく、末子音も音象徴に関わっている。

3. 1 頭子音

・「n」「y」で始まるものは、柔らかい、遅い、ゆったりしたといった語感を持つ。

例：「nerp-naap」：ゆっくりして動くさま。のんびりする行動。

「yuud-yaad」：遅く動くさま。

「num-nim」：ものが膨らんで柔らかいさま。

「yuap-yaap」：急がずに揺れ動くさま。また柔らかで力のないさま。

「nerp-naap」と「yuud-yaad」は、ゆっくり遅く動くという意味である。他方、「num-nim」「yuap-yaap」は、柔らかい様子を表す。ただし、「y」が付くものは、マイナスイメージも含むと考えられる。

- ・「r」「l」を含んでいるものは、滑らか、スムーズで素早く進行するニュアンスを表す。

例：「riip-reng」：わき目もふらずどンドンゆくさま。

「ruad-rew」；素早く進むさま。

「luun-lai」：物事がつかえないで進むさま。なめらかなさま。

「klong-klew」：なめらかに進むさま。滞りなく話したり行動したりするさま。

例のように、「riip-reng」と「ruad-rew」は、速やかに進む様子を表し、「luun-lai」

「klong-klew」は、スムーズで滑らかな状態を表す。

- ・「ng」で始まるものは、ほとんどが不明瞭、静かで暗いイメージを与える。

例：「ngeap-ngan」：物静かなさま。黙っているさま。

「ngeap-ngow」：静かにもの寂しいさま。

「ngum-ngam」：口を十分に開けないでわからぬことを言うさま。

「ngoon-ngen」：力なくよろめくさま。またしっかりしていない不安定なさま。

- ・「k」「p」「t」で始まるものは、擬音語が多い。

例：「kriid (きゃー)」「kaa-kaa (かーかー)」「kong-kong (こんこん、ごんごん)」「kik-kik (くすくす笑う)」「kruun-kruun (ぐうぐういびきをかく)」「pang-pang (ぱんぱん)」「pong (ぽん)」「pram-pram (雨がしとしと降る)」「po-pae (雨がぼつぼつ降る)」「plaep (ちくつとする)」「tum-tum tom-tom (どきどき)」「tuum (どーん、どかん、どしん)」「to-tae (よたよた、よちよち)」「tuk-tak (かちかち)」

3. 2 末子音

前にも述べたように、タイ語の擬音語・擬態語では、頭子音だけでなく、末子音も意味ニュアンスに関わっている。タイ語の末子音は、「k」「d」「p」「m」「n」「ng」「y」「w」の八つであり、それぞれの末子音が含まれる擬音語・擬態語は、異なったニュアンスを表す。

3. 2. 1 摩擦音

- ・「k」「d」「p」の語末を持っているものは、音声や動作の急な終わり方を象徴すると考えられる。

例：「kik-kik (くつくつ、くすくす)」、「krik (かちやつ、ぱちつ、がちやつ)」、「krop (かりつ、さくつ、ざくつ)」、「kok-kok (こっこつ、こつこつ、こんこん、かつかつ、かたつ)」、「chiid (ちくつ)」、「chap (ばさつ)」、「pok (ぽきつ、ぱりつ)」、「plaep (へろつ、ペろつ)」、「pud-pud (ごぼつ、ぼちやつ)」、「kwap (じろつ)」、「wep (きらつ、ぎらつ)」、「leup (ちらつ)」、

「wap (ぼつつ、ぼつん)」、「waap (ひやっ、ぎくっ)」、「huap (がくっ、がくん)」、「heuk (どきっ、はらはら)」

- ・「k」「d」「p」の語末で終わるものは、堅いと感じられる。

例：「tik-tek」：堅い物が触れ合う音。

「kok-kok」：堅いものに触れ合っ出て出る音。また堅い物を打つ音。

「krood」：堅いものが大きく擦れ合っ立てる音。

「krop」：堅い物を嚙んだり折ったりするさま。

「kraek-kraek」：堅い物を搔く音。

- ・「k」「d」「p」が付くものは、品のない、またマイナスイメージを表すものが多い。例えば、「saak」(ざらざら)、「paak」(からからに乾く)、「kaak-kaak」(げらげら笑う)、「hook-haak」(がみがみ言う)、「ngud-ngid」(いらいら、じりじり、やきもき、むしゃくしゃ)、「mup-mip」(もぐもぐ、ぶつぶつ言う)、「chok-chek」(がやがや、ざわざわ騒ぐ)などが挙げられる。

3. 2. 2 鼻音

- ・鼻音「m」「n」「ng」で終わる語は、擬音語として用いられることが多い。

例：「kong-kong」(ごんごん、ごーん)「ting-ting」(ぼとぼと、ぼたぼた、ぼたりぼたり)「tum-tum tom-tom」(どきどき)「kring」(ちーん、ちりんちりん、ちゃりん、きんこんかん)「kruun-kruun」(ごろごろ)「tuum」(どしん、どすん、どかん)「pong」(どんどん、どかん)

- ・「ng」で終わるものは、「弾力性」「共鳴」を象徴する。「kong-kong」「ting-ting」「kring」「pong」「pang-pang」「pleng」など前述の例のように、いずれも音が弾んで響くイメージを表す。

- ・末子音「m」「n」が付く多くのものは、不明瞭さや不安定さを表す。

例：「tuam-team」(よちよち、よろよろ、よぼよぼ、のこのこ、とぼとぼ)

「oom-aem、ngum-ngam、prum-pram」(もぐもぐ、もじもじ、むぐむぐ、ぶつぶつ)

「pan-puan」(めちゃめちゃ、めちゃくちゃ、むちゃくちゃ)

「ngun-ngaam」(まごまご、もたもた、ぐずぐず、ばたばた)

「ngoon-ngean、klorn-klaen」(くらり、くらくら、ぐらぐら、よろよろ、ぶるぶる、がたがた)

3. 2. 3 接近音

- ・末子音「w」を含んでいるものは、摩擦音が末子音に来る場合と比較すると、より範囲が

広いと感じられる。例えば、「wep-wap」と「wew-wau」のペアは、星などが光るさまを表すが、「wep-wap」よりも「wew-wau」の方が広範に光っている状態を表す。さらに、「wep-wap」は、一度光るあるいは、瞬間的に光るというニュアンスを表すのに対し、「wew-wau」は、やや時間をかけて持続的に光るというニュアンスを表現する。日本語に当てはめれば、「wep-wap」は「きらっ」に、「wew-wau」は「きらきら」になる。

・末子音「y」で終わる語は、ゆったりとした、静かな、柔らかいと感じられる

例：「prooi-prai」：雨が柔らかく降り始めるさま。

「yoy」：滴が少しずつ垂れ落ちるさま。

「riay-piay」：目的なく歩き回るさま。何となくのんびりして行うさま。

「ngoy」：静かに寂しそうで元気がないさま。しおれているさま。

4. 3 まとめ

以上のように、日本語においても、タイ語においても、擬音語・擬態語は、形態と意味が関連性を持っていると言える。異なる形態によって、様々なニュアンスを表すと考えられる。

・反復形という特殊形態を持っていることが、日タイ両語の共通点である。「ごろごろ」のような反復形や「ngun-ngaun」（ばたばた）のような反復形変種は、いずれも動作・状態の繰り返しや継続を表す。

・日本語の長音化された母音とタイ語の長母音が擬音語の中で用いられる場合は、いずれも「共鳴」というニュアンスを表す。しかし、擬態語の場合、日本語では「強調」というニュアンスがあるのに対し、タイ語にはない。

・日本語の擬音語・擬態語は、有声音（濁音）と無声音（清音・半濁音）の対立によって、ニュアンスの違いを表すが（「ころころ」「ごろごろ」）、タイ語には有声音と無声音の対立がないので、このような違いは見られない。

・「あ」「い」「う」「え」「お」という母音を持っている日本語では、各母音それぞれが象徴的な意味ニュアンスを持っている。これに対して、タイ語では、短母音と長母音の対立の方が優先されると考えられる。

・タイ語においては、頭子音だけでなく、末子音も音象徴に関わっている。

・日本語の促音「っ」（きらっ）という特殊形態同様に、タイ語の摩擦音末子音「k」「d」「p」（wep）も「瞬間性」や「急な終わり方」を象徴する。

・日本語の撥音「ん」（こんこん）という特殊形態同様に、タイ語の鼻音末子音「ng」（kong-kong）も「弾力性」「共鳴」を表すと考えられる。

5. おわりに

以上、日タイ両語の擬音語・擬態語をめぐって、日本語を中心としながら両言語の対照的研究を試みてきた。両言語は、音韻的にも形態的にも構造が異なるが、擬音語・擬態語においては、種々の類似点が存在する。

日タイ両語には、自然界を描写する擬音語や人間の動作様態を象徴的に表現する擬態語が実際に多数存在しており、知らず知らずのうちに、あるいは無意識に使用されている。したがって、日本語らしさ、タイ語らしさを身につけるためには、擬音語・擬態語の学習が不可欠だと言えるであろう。

「CV」から成る日本語と「CVC」から成るタイ語は、全く違う構造を持つ言語であるが、両言語の擬音語・擬態語は、形態と意味が深く関わっている。

形態と意味の関連性については、厳密な規則はないが、本稿では、例を示しながら、擬音語・擬態語はどういう形態を持っているのか、各形態はどういうニュアンスを表しているのかということについて述べてきた。さらに、擬音語・擬態語の文法的機能についても考察を加えた。タイ人日本語学習者にとって、日本語の擬音語・擬態語の習得は、大変難しく、また参考書も不足している。このレポートを出発点として、今後さらに日タイ両語の擬音語・擬態語に関する研究を進め、学習者が効果的に日本語を習得できる方策を探っていきたいと思う。

参考文献

- 浅野鶴子編（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店
田守育啓（2003）『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店
天沼寧編（1974）『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
白石大二編（1982）『擬音語・擬態語慣用句辞典』東京堂出版
堀井令以知（1986）『擬音語・擬態語の言語学』明治書院
尾野秀一編（1991）『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂出版
笈寿雄・田守育啓編（2003）『オノマトピア』勁草書房
日向茂男・日比谷潤子（1989）『擬音語・擬態語』荒竹出版
三戸雄一・笈寿雄編（1981）『日英対照：擬声語（オノマトペ）辞典』学書房出版
小林英夫（1976）『国語音象徴の研究』みすず書房
ローレンス・スコウラップ（1999）『オノマトペ・形態と意味』くろしお出版
宮本マラシー（1996）『タイ語の言語表現』大阪外国語大学学術研究双書17
森山卓郎（2001）『日本語とタイ語の擬音語・擬態語の研究へむけて』ひつじ書房

上田美和（2002）『ピーチガール』日本語版・タイ語版 Kodansha Comics

矢沢愛（1999）『NANA』日本語版・タイ語版 Shueisha Inc.

コーサー・アリヤ（1996）『日タイ辞典』 Thammasat University

コーサー・アリヤ（1996）『タイ・日本辞典』 Thammasat University